についての調査では、日本の学生よりもフィンランドの学生の方がこの能力が高いことがわかりました。この能力は12の項目から成り立っていますが、「異なる文化的背景の人々に対して防御的か統合的か」「不確実性への耐性」「権威主義的態度」「相互関係性重視」「共感と使命感」「社会的責任」などの点で両国の学生に違いが現れ、フィンランド人学生の３分の２に「多様性尊重」、日本の約半数に「民族相対主義的だが、伝統主義」という傾向が見られました。教員も同様の傾向があると予想され、フィンランド人の違いや不確実性に対しての柔軟さ、社会的責任の高さ、公平性を重んじる態度が、結果的には教育の効果を上げることにつながっているのかもしれません。この調査はまたコミュニケーション能力の向上と、複数の外国語学習、異文化の人々との個人的接触（友人としてつきあうなど）、発展途上国での居住経験などが異文化間能力を上げる効果があることも示しています。

その他にも多民族社会の学校を訪問してきました。エストニアと中国の朝鮮族学校は興味深かったです。今後はこの調査に使用した質問事項などを精選し、他国も比較調査に入れて導き出される結果を、日本の教員養成の場に取り入れるべくがんばっていきたいと考えています。

アンダーソン卒業生の近況

中村隆夫

1994年にアンダーソン・スクール（当時はAnderson Graduate School of Management、略称AGSMと呼ばれていました）を卒業しました。

これまでの紆余曲折の経歴について、ご説明します。まずは、日本で大学卒業後日本銀行に就職。入行後３年ほどして日銀からの派遣留学で2年間UCLAへ。アメリカ西海岸のアントレプレナー精神に触発されたのか、留学から戻って1年半ほどで日銀を退職し、知人が数人で立ち上げたデジタルガレージという小さな会社（いわゆるネットベンチャーの走りですね。今はJASDAQに上場しています）にCFOとして参画しました。いわゆる「貸し渋り・貸し剥がし」の資金難などに耐えて何とかつぶれずに数年過ごした後、同社の一部門として始めていたインフォシークという検索サービスを別会社化しその初代社長に就任。このインフォシーク・ジャパンは色々とあった末、最終的に当時日本で株式公開をしたばかりの楽天に買収されました。それから間もなく私は

インフォシークから身を引き、次のビジネスのネタを探すべく、知人などが経営するIT系ベンチャー企業の社外取締役やアドバイザーなどを務める生活へ移行しました。そうした中で、自分で一つのビジネスに集中して経営をするのもいいけれど、他の経営者を手伝って色々なビジネスの発展や融合に関わっていくのも面白いし自分の性に合っているかも知れないなどと思い始めたところで、法科大学院が日本でも立ち上がることに。「だったら法律の専門知識を持った上で経営者の手伝いをするプロになってみよう」と考えるに至り、法科大学院のいわゆる未習者コース（法律をゼロから学んで3年間で卒業するコース）の第一期生として2004年春に東京大学法科大学院に入学しました。若干の社外取締役などを続けながら法科大学院を卒業し、新司法試験に何とかパスしてから、1年間の司法修習を経て、今年1月から弁護士としての生活を始めたところという次第です。

私が現在所属している法律事務所（鳥飼総合法律事務所）は、いわゆる企業法務と税務訴訟が業務領域の二本柱となっています。これまでの様々なご縁を頼りに色々な企業